感染症領域における DDS の活用

特集によせて

FOREWORD

長崎大学病院 検査部

柳原克紀*

世界的な新興・再興感染症の出現、薬剤耐性菌の蔓延に伴い、感染症は難治化しており、新しい薬剤が求められている。しかしながら、シーズの枯渇や収益性の問題から新規抗菌薬の開発が進まなくなってきた。そのため、治療薬中心の感染症診療から予防を推進する医療にシフトしている。この理由としては、予防医学への認識の高まりや科学技術の進歩により優れたワクチンを創成できるようになったことが指摘されている。予防できる疾患は可能な限りワクチンで予防し、薬剤耐性菌や真菌などに対しては適切な薬物治療を行う感染症診療が一般化していくであろう。このような状況で、新薬開発からワクチン開発にかじを切っている製薬企業も多い。高齢者や免疫不全宿主の増加により、これからの感染症はますます難治化・複雑化する。DDSの技術が応用され、安全で予防効果が高いワクチンや薬剤耐性菌にも有効な抗微生物薬が開発されることが望まれる。

この特集は、感染症領域における DDS の活用を再考する目的で企画された。この領域の第一人者である長崎大学の佐々木 均先生に OPINION をご執筆いただいた。杏林製薬の北村 嘉章先生には、抗菌化学療法を考える上では、必須の知識である PK/PD 理論につき、わかりやすくまとめていただいた。富山大学の福森 史郎先生、辻 泰弘先生には、日常診療で頻繁に処方される内服薬の DDS につき、ご執筆いただいた。長崎大学の賀来敬仁先生には、患者が最も多いとされる呼吸器感染症における吸入療法の現状と展望に関して、ご解説いただいた。大阪市立大学の金子 幸弘先生には、実用化されている抗真菌薬の DDS 製剤につき、その有用性や使い方について、お書きいただいた。医薬基盤・健康・栄養研究所の鈴木 英彦先生、國澤 純先生には、これからのワクチン開発で最も期待される粘膜ワクチンに関する最新情報をお示しいただいた。

感染症は、世界で最も罹患者数が多い疾患であり、ワクチンや新薬に対するニーズも高い。本特集をお読みいただき、一人でも多くの方に「感染症領域における DDS」にご興味をもっていただけたら幸いである。

* Katsunori Yanagihara : Application of DDS for the infectious disease
Department of Laboratory Medicine, Nagasaki University Hospital